



Title	アイスランド語の前置詞án/ón<～なしに>の語源とその成立過程について
Author(s)	清水, 育男
Citation	IDUN - 北欧研究 -. 2025, 25, p. 39-53
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100750">https://doi.org/10.18910/100750</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# アイスランド語の前置詞 *án/ón* <～なしに>の語源とその成立過程について

清水 育男

## 1. はじめに

代名詞や前置詞、接続詞などの機能語はその言語の核心的な役割を果たすために時代を経ても機能は大きく変化しない。そのような機能語の語形や発音などが複数の言語間において相互に一致があればあるほど、またそうした機能語が多ければ多いほどその親戚関係は密であるとも言える。そうした機能語の一致が一目瞭然で判別できる語彙が多いのがノルド諸語（アイスランド語、フェーロー語、ノルウェー語、デンマーク語、スウェーデン語）である。たとえば、代名詞「彼」に相当する古・現代アイスランド語 *hann*、ノルウェー語/デンマーク語/スウェーデン語では *han*、接続詞の「そして」に相当するのは微妙な発音や綴りの違いもあるが、現代アイスランド語/ノルウェー語/デンマーク語では *og*、スウェーデン語は *och*<sup>1</sup>であり、これらをみれば専門家でなくても同語源と認識できよう。

しかし機能語の一部には、意味は一致しているのにどう見ても同じ語源とは認定しがたい語もある。それがここで取り上げる前置詞 *án/ón* <without>である。この前置詞は古・現代アイスランド語で連綿と使用されてきているが（ただ、*ón* は現代アイスランド語ではもはや使われない）、同じ意味の前置詞に対して他のノルド諸語ではまったく語源の異なる前置詞を使っている。フェーロー語 *utten*、ノルウェー語 *uten*、デンマーク語 *uden*、スウェーデン語 *utan* である。アイスランド語以外のこれらの前置詞は相互に多少の相違は認められるものの、すべて同じ源に発していることは識別でき、これらはすべて *ut-/ud-* <out> と何らかの派生辞 *-en/-an* から成立していることは推察できよう。これらの前置詞とはまったく類似性が見出せないアイスランド語の前置詞 *án/ón* は一体どこから来たのか、それを知るためにはまずその語源が何であるのかを知る必要がある。本稿はその語源と成立過程について考察する。この前置詞は古期から現代まで途切れることなく使用されてきているので、本稿では古期と現代を特に区別する必要がない限り、単にアイスランド語と表記する。

## 2. アイスランド語の *án/ón* の語源の先行研究

その異色性のためかアイスランド語の前置詞 *án/ón* の語源について触れる語源辞典は多い。しかし、それぞれほぼ類似した語源の提案がなされていて、新たな

<sup>1</sup> この *-ch* の発音は */k/* であるが、綴りはドイツ語からの影響で 1526 年の *Gustav Vasa* の新約聖書から使われている。

説は特になく今日まで来ている。

ほぼすべての語源辞典の解釈はまずゴート語の前置詞 *inu(h)*, 古高地ドイツ語 *ânu* (現代ドイツ語 *ohne*) や古サクソン語などに関連付け, そこからゲルマン語を離れて, ギリシア語 *ἄνευ*, そして遠くトカラ語やオセッ語にも言及する (Holthausen: 1948; de Vries: 1977; Ásgeir: 1986, それぞれの *án* もしくは *án* 関連の項)。もちろんこれらの辞書間でも細部の解釈は異なるが, ゴート語 *inu(h)* に対してアイスランド語 *án/ón* や古高地ドイツ語 *ânu* との間にはアブラウト (Ablaut) による \**enu* (e 階梯) : \**ēnu* (延長階梯) としていることはほぼ共通している。現在ではこのアブラウトの解釈をさらに進め, 同じ NOMINAL の中で強勢・格のパラダイム内の相違に起因するところまで来ている (Hamp: 1982; Kroonen: 2013)。

4 章で考察する語源は, ギリシア語やトカラ語などとの比較を求めず, さらにはゴート語の *inu(h)* や古高地ドイツ語の *ânu* にも拠らず, できる限りノルド諸語内で解決が図れれば, 語源の信憑性も増すであろう。したがって, ここではこれまでとはまったく別の語源を提案する。これまで唱えられてきた様々な語源説には格支配の実態についての説明が欠如しているように思われる。本稿ではまずノルド語内で処理することに集中し, 上記の外向きの語源説の妥当性には言及しない。ただ, 示唆的な説明や解釈はもちろん参考にした。

### 3. 前置詞 *án/ón* の格支配について

前章で言及した各語源説では, 語源解明にあたって前置詞 *án/ón* の格の支配について深い考察が見られない。語源を確定するには, 音変化の見極めがきわめて重要であることは当然であるが, 一方でこの前置詞の機能やなぜ属格を必要とするのかの理由を把握したうえで探求する必要がある。上記の各種の語源説は真っ先に類似した形, そして意味が相似していることから出発しているように思われる。もちろん, それらの前提は間違っていないが, 機能語でもある前置詞 *án/ón* がなぜ特定の格を必要としたのか, それが前置詞形成にどのように寄与したのか, また *án/ón* それ自体が一体何を意味していたのかも考えなくてはならない。さらにそれがどのようにして一前置詞として機能するようになっていったのか, そのプロセスにも思いを馳せなくてはならないだろう。これらが明らかになって初めて, 語源の問題解決の入口に立てるのではあるまいか。

そもそも古アイスランド語では *án/ón* の格支配が属格, 与格, 対格と 3 つに及んでいる。しかもさほどメインとも言えない前置詞が 3 つもの格を取れること自体がきわめて異例である。古高地ドイツ語 *ânu* も属格, 与格, 対格の 3 つの格を支配するが (Schützzeichel 1981: *ânu*), ゴート語の *inu(h)* <without> は対格支配のみで, 古アイスランド語や古高地ドイツ語からは明らかに一線を画しており, その理由の説明が尽くされない限り, 格支配の観点からゴート語の *inu(h)* が同語源であるかどうかにはまず疑問符が付く。しかも *inu(h)* はこれまでの語源説では少なくともゲルマン

語内では *e* 階梯であり、延長階梯を示す古アイスランド語の *án/ón* や古高地ドイツ語 *ānu* と同語源であるという説には直ちに賛同しえない。格とアプラウトの階梯の問題が明らかにされない限り、ゴート語の *inu(h)* は古アイスランド語の *án/ón* の語源からは一旦切り離されよう。

その意味で古高地ドイツ語とアイスランド語とは一定の関係性があることは否定できない。問題はその後両言語で格支配の変化プロセスに大きな相違が生じることになる。*ānu* はその後、属格、与格、対格支配のシステムを維持できずに現代ドイツ語の *ohne* にあるように対格支配のみとなり、一方現代アイスランド語の *án* は属格支配で一本化されてゆく。この変遷プロセスの違いをみると両者も即同語源といえるかどうか疑問が残る。

そこでまず、アイスランド語の前置詞 *án/ón* の初出はいつで、格の支配状況はどうであったのかを考えなくてはならない。*án* と *ón* の違いは後述するとして、この前置詞の初出を調べてみよう。まずは古アイスランド語の最古層ともいえる Edda 詩からみてみよう。前置詞 *án* の使用例は 4 件あるが (Kellogg 1988:18)、そのうちの 3 件(不定詞支配の *Háv* 68 や前置詞の目的語が省略されていると思われる *Alv* 7 と *Atm* 39)は格の支配が特定できない。ただ、残る次の 1 件は間違いなく属格支配である。その一方で、与格や対格支配の例は最古層からであっても 1 つも見出せない。

*hvárggi mátti annars án vera*, (*Sól* 11) <nor would one be without the other> (テキストと訳は Hollander 1936:101, 104 による)。*án* が後置詞的に働いているが、直前の *annars* が *án* の目的語で、序数詞 *annarr* の男性・単数・属格)

*Sól* (= *Sólarljóð*) はキリスト教の影響を受けている点で本来の Edda 詩からやや逸脱はするが、原語の古さは 1100 年代から 1200 年代にさかのぼると言われている (Hollander 1936: 101; Hallberg 1964:161)。1 件ではあるが、間違いなくこの時代に属格支配の用例が実在していたことは特筆に値する。

時代をやや下れば Cleasby & Vigfusson (1957) や *ONP* (1995) の辞書(*án* 項目)に 対格支配や、与格支配の例とともに、属格支配の例も多々挙げられている。大事なことは上で確認したように、すでに 1200 年代以前から属格支配が厳然と存在していたことである。一方で、与格支配は Cleasby & Vigfusson (1957) によると翻訳に多く現れ、対格は法律関係の文脈に現れるという (5 章参照)。つまり、与格や対格の出現分野は特定の領域に限られ、属格支配は特に分野の縛りがない。その後の時代の格支配の推移については紆余曲折があったものの、次第に与格、対格は衰退し、結局現代アイスランド語では属格支配一本に絞られている現実がある。属格支配については、いわば Edda 詩から今日まで途切れることなく綿々と根強く続いている事実がある。このことは前置詞 *án* の格支配の原点は属格であって、与格支配や対格支配は分野による使用領域に偏りがあり、そのためその基盤は決して強いとはいえず、これら 2 つの格支配はむしろ後発的であったのではないかと推測される。

そこで、属格のみを支配する前置詞を他に見つけようとすると、現代アイスランド語 *auk* <～に加えて>、*sakir/sökum* <～のために>、*til* <～に向かって>、*vegna* <～のために>、

(á) meðal<～の間で>, (á) milli<～と～の間で> があり, フェーロー語では(i)millum<～の間で>, til<～の方へ>などがあるが (Lockwood 1964: § 97), sakir/sökum は名詞 sök<事, 咎>(sakir は複数・対格; sökum は複数・与格) を基にしてできた前置詞で, その直後に属格の名詞や代名詞が置かれれば自ずと<X のせいで, X が理由で>と解釈されるので, ここに属格が来るのはごく自然であろう (比較: 英語 for God's sake).

auk も動詞 auka<増加する>からの名詞であること (Cleasby & Vigfusson: 1957) は明らかで, <X の増加>と考えれば, 属格支配となったとしても何ら違和感はない. meðal, milli も元々はともに名詞 meðal<真ん中> (英語 middle 参照) から成立したもので, 前者はその対格, 後者 milli は meðal の与格 miðli から変化した形である.

フェーロー語の(i)millum の millum も名詞 miðal<真ん中>の複数・与格で, そうであればこれらはすべて<X の真ん中>, <X の間>ということになり, こどもこれらの前置詞に従う名詞や代名詞が属格となることは容易に領ける. これらの名詞はその前に置かれた前置詞 á が対格支配により á meðal, 与格支配によって á milli, í により与格支配を受けて í millum が形成されているが, 注目すべきは名詞が中核となって前置詞句を形成するとき, その名詞がいかなる位置関係や因果関係にあるのかを示す前置詞がその直前に置かれることである. アイスランド語もフェーロー語もこれらを英語に置き換えれば "in the middle of X" となり, 日本語で言えば <X の真ん中で>, <X の間において>と解釈でき, meðal などの前に前置詞が置かれ, さらにその名詞を特化するために属格が来ることは日本語の感覚からしても素直に受け入れられる.

vegna は中世低地ドイツ語 van ēnes wegene からの借用(Ásgeir 1986: vegna)とされ, wegene は weg<道>の複数・与格と言われている. 現在のドイツ語の前置詞 wegen<...のために>[属格, まれに与格支配]は von...wegen の短縮形とされているが, 前置詞の von は今では脱落している. 他のノルド諸語もこの中世低地ドイツ語から借用し同様の意味を表す表現がある. スウェーデン語で言えば å/på familjens vägnar<家族の代理で, 代表して>があるが, アイスランド語では当初 von, van, å/på に相当する前置詞として af/á を用いて[af/á+属格+vegna]の構造で用いられていたが (Cleasby & Vigfusson 1957: vegna), 現在では属格はそのままであるが, 前置詞 af/á は脱落している.

最後に til であるが, これは元来「目標, 目的点」を意味するドイツ語の Ziel と同語源の\*tila-に由来するとされている. til は通例移動・方向性を表す動詞とともに用いられ, 印欧祖語の時代から目的点是对格で表現されてきたので, 目的点である til そのものに対してはその直前に何ら前置詞を置く必要はなく, 移動の動詞と共に用いられれば, 名詞である til は当然その動詞の目的語となって対格をとり, 機能上方向性ならびに目的点や着地点が表される. しかし, どんな目的点であるのか示すためにはそのあとに属格の名詞/代名詞を付加して明確化する必要がある. それがアイスランド語の til の属格支配に連結している.

いずれにせよ til 自体は対格のままで独自に機能できるので, til の前に前置詞を



置く必要はない。その結果、til は単独で属格支配の前置詞となった。一方、大陸ノルド諸語でも同様に til は本来属格支配であったが、属格支配は弱まり、もはや属格は慣用句にのみ残り（その痕跡は今でも大陸ノルド諸語に容易に見出せる。スウェーデン語から例を挙げれば till bords <食卓に>, till salu <売り物の>など）、全面的に対格支配に取って代わられてしまっている。生得的に属格支配であったにもかかわらず til は時代とともに属格を維持する力が失われていったのは、大陸ノルド諸語で全般的に 1400 年代後半頃から名詞の格融合(Kasussynekretismus)が生じ、それと連動して相対的に対格の力が強まった故と思われる。

以上からみると属格支配の前置詞は総じて名詞由来ではないかと疑われる。til は上述したように、名詞\*tila-が属格を従えながらそのまま前置詞化したと考えられる。それ以外の属格支配の前置詞も、元来は名詞に由来し、その名詞を特化するために、その名詞の直後に置かれる名詞や代名詞を属格にする以外に方法はなかったともいえる。したがって、属格支配の前置詞はまず[本来の前置詞+名詞+属格]の構造から前置詞句的に機能していったのではないかと推し量れる。しかし、アイスランド語もフェーロー語もそうであるが、当初置かれていた本来の前置詞 á, í は今では省略されても問題はなく、上で示したように文法書でも通例これらの前置詞は（ ）付きで省略可と説明されている。現に[af/á+属格+vegna]/[af/á+vegna+属格]では本来の前置詞 af/á は今では完全に脱落している。

auk はどうかというと、語源的に大陸ノルド諸語の og/och, 古高地ドイツ語 ouh (> auch)が挙げられていることから (Cleasby & Vigfusson 1957: auk; de Vries 1977: auk), 名詞でありながらも時に接続詞もしくは副詞的要素を持っていたために、直前に前置詞を置く必要がなくそのまま属格を従えて前置詞になり切ったのではないかとと思われる。これ以上の追及は難しいが、ここで注目すべきは、総じて属格支配の前置詞は元来名詞由来で、前置詞句的に機能するために直前に本来の前置詞が置かれたが、直後の名詞が次第に単独で前置詞的に機能し始めると、直前の前置詞は省略から脱落へと辿っていた過程が観察できることである。すなわち、これら属格支配の前置詞はその成立過程からすれば名詞起源と考えて差し支えないであろう。

大陸ノルド諸語の前置詞 til も含めて、属格支配の前置詞が属格を放棄し、多くは（ドイツ語 ohne を含めて）対格支配の前置詞へ移行していった例は間違いなく存在する。しかし、与格支配の前置詞、対格支配の前置詞あるいは与格・対格支配の前置詞が相応の理由もなく新たに属格支配を取り入れる例や、これまで支配してきた格を放棄して属格支配へ移行したという例はまずない。言い換えれば、現在も属格支配を保持している前置詞はさかのぼっても、もとより属格支配であり、属格支配こそが出发点であったと想定せざるをえない。属格支配であるということはその前置詞は取りも直さず元来名詞であり、今ここで問題となっている前置詞 án/ón も、古くから今日に至るまで属格支配を堅持してきているからには、その起源は自ずと意味的にもこの án/ón と関連性の強い名詞を視野に入れて探求してゆかなくてはならない。

#### 4. 前置詞 án/ón の語源の再考

これまで主張されてきた án/ón の語源はその再建形が\*ānu にさかのぼるところまではほぼ一致している。しかし、この\*ānu が一体何であるのか、その先は解明

されていない。同語源に古高地ドイツ語やギリシア語の例などが示されてはいるが、\**ānu* 自体を予め前置詞と既定しているかのように扱われ、それ以外の選択肢が追求されていない。確かに\**ānu* だけ見ていると前置詞以前の意味が何であったのかを特定するのはきわめて難しい。なぜなら、\**ānu* の周辺に意味的にも語源的にも結びつきそうな語彙が見つからず、まったく孤立しているからである。そこで、本章では前章の結論に基づき語形\**ānu* の背後に何か隠れた名詞などが見出せないかを探してみる。

\**ānu* 自体の根本の意味も特定できず、また関連語彙も見つからなければ、今のままの\**ānu* の語源説では得心が行かない。そこで前置詞 *án/ón* のもつ「～なしに」の本来の意味にも適合し、またその形がその後の音変化を通して *án/ón* に連結するような名詞があれば、より適切な解決に繋がる。そこでまずは「～なしに」の意味に符合するような名詞が存在するかどうかを見てみたい。

面白いことに、古アイスランド語にはかつて\**ānu* が名詞であったことを示唆するような形容詞が存在する。それは、まさに“不足、欠如”を表す形容詞 *vanr* <lacking, wanting>である。*vanr* は Edda 詩に 20 か所ほど使われているが(Kellogg 1988: *vanr*)、そのうちの 1 例を以下に挙げる<sup>2</sup> (テキストは *Edda* (1962)による)。

Handar em ek *vanr*, en þú hróðrsvitnis, (*Lks*. 39)

<私は片手を失っているが、お前はフローズルスヴィトニルを失っている。>

[*vanr* は形容詞の目的語として単数・属格 *handar* (←*hönd*<手>)を、後続の文でも固有名詞 *hróðrsvitnir* の属格 *hróðrsvitnis* を支配している。]

この形容詞 *vanr* はゴート語の形容詞 *wans* と同語源で、そのゴート語の名詞形には *wan* (中性) <lack, want>と *waninassus* (男性) <want>が存在している (Lehmann 1986: W32)。前者は *wans* から直接導き出された名詞形であるが、後者は名詞形成接尾辞 *-inassu-* が付加された、いわば派生名詞である。ちなみにこの名詞 *wan* が属格をとる例文も見ておこう (Schulze 1847: *van*(=*wan*))。

*ainis þus wan ist*, (*Mk* 10, 21; *L* 18, 22) <あなたに足りないことが一つある>

[*ainis* は *wan* に掛かる数詞 *ains* <1>の中性・単数・属格。 *þus* は 2 人称単数代名詞 *þu* の与格で「あなたのもとに」の意味。 *ist* は不定詞 *wisan* (英語の *be* 動詞に相当) の直説法現在・単数 3 人称]

目下求めているのは古アイスランド語において形容詞 *vanr* の一次的な名詞形である。確かに、*vansi* (男性) <lack, disgrace, harm>はあるが、意味が「不名誉」や「損害」などまで拡大しており、しかもこれは動詞 *vansa* <to do too little>からの派生語であって (de Vries 1977: *vansa*)、*vanr* から直接派生した名詞形ではない。すると *vanr* の名詞形は存在しなかったのであろうか。ゴート語の *wan* のように、少なくとも接尾辞を介するような二次的な派生語ではない名詞を探すことはできないであろうか。文献には残らなかったとしても、その残存形と思われる語を広く他のノルド語地域からも見出すことはできないだろうか。

<sup>2</sup> 以下の例文中に出てくる *vanr* の目的語が属格であるのは *vanr* に“不足、欠如”の意味が内在するためであって (Cleasby & Vigfusson 1957)、本稿で論じている属格とは関係しない。

今ここに、1370 年 Bergen の *DN*(= *Diplomatarium Norvegicum*):41312 の中に、*uan* という前置詞が見出される。語頭の *u* は *v* と同等であることから、この *uan* は前置詞 *ván=án* のことであると記述されている (Hægstad 1916: 170)。

ok aullu þui betra þikir at hafua en uan att væra. (下線は筆者による)

〈思うに、そのことすべてについて無いよりはあった方がいい。〉

一方 Seip (1955: 301) は上記の *uan* の *u*-は *vera án* の表現に現れる動詞 *vera* の語頭の *v*-が「多分 (*kanskje*)」*án* に書き添えられたのではないかとしている。もし動詞 *vera* の *v* の影響とするのであれば、*uan* より *van* と表記されるべきはずなのにそうではないので、この説は額面通りには受け取れない。Hægstad (1916: 170) はこの書き添え形を、西ではなく東ノルウェー方言としているが、これもそれを裏付ける記述はない。Seip は 1370 年に *uan* と書かれた *von* の *v* は「付加 (*tilagt*)」されたものであるとしながらも *on/án* であるとみなし (*on* は Seip による *ón* の誤字と思われる)、Hægstad も Seip も *v*-を付加とし、ともに前置詞 *án/ón* と同等であるとしている。ちなみに、Torp (1919: *Vôn*) も *ván/vón* を西ノルウェー方言の *vôn* と同等とし、古ノルウェー語 (古アイスランド語でもある) の *án/ón* に由来すると明言している。ただ、*v* が付加された理由までは誰も確定するには至っていない。

しかし、一方で Seip (1955: 280, 301) は *v*-が語頭において付加された例を、他にも *vorðinn* (= *orðinn*)/*vordit* (= *orðit*) [*verða* <～になる> の過去分詞], *vunnit* (= *unnit*) [*vinna* <勝ち取る> の過去分詞] を挙げている。ここで気になるのは *v* が付加されているこれらの語はかつて語頭の *v*-音を失ったのだが、この付加によってそれが復活されているという共通点が見出せる。すなわち、*orðinn* も *unnit* もかつては語頭に *v*-音が存在していた。*v*-付加の現象は、確かにそれぞれの不定詞や単数過去形に残る *v* からの類推による復元と考えられるが、これらすべてはかつて *v*-音が存在していた語頭にのみ復活してきていることに注目したい。まったく何の根拠もなしにどんな語頭にでも *v* が付加されたというのではない。すると、(*v*)*án*/(*v*)*ón* もかつては *v* が存在していた過去が暗示され、今ここで失われた形を *nynorsk* にもある *vanta* <不足している> などを通して *v* を復元し、回復した姿と考えることができるのではないだろうか。もしくは、ノルウェー方言では初めから失われることなく *v* が残っているとさえ考えることもできる。いずれにしても、*án/ón* の語頭に *v* がかつて存在していたと想定でき、*\*ānu*-の前身形に *\*vānu*-を再建することは許されるであろう。それでは、*\*vānu*-とは一体何なのか。

## 5. 前置詞 *án/ón* の前身形 (preform) *\*vānu*-とは何か？

*\*vānu*-の継承形が 1370 年のノルウェー語 *ván/vón* であったとするなら、その語が現在のノルウェー語に残存しているであろうか。Bokmål ではなく *nynorsk* に以下のようなフレーズがある (Skard 1965: *vón*). *eg er* (または *mår*) *det ikkje von*. または *eg kan ikkje må i von det*. とともに <私はそれなしに済ますことはできない>。Skard は *vón* の品詞については何も述べていない。ちなみに、*vón* の *ó* は Skard に



よると強勢を示している。副詞か後置詞かのようにも思えるが、*von* は前置詞 *i* の目的語となっているため、これは名詞 <不足>としか解釈できない。この語は Aasen (1892: *von*) の辞書にも記載があるが、特に説明もなく形容詞としている。おそらく上の例にあるように連辞動詞 (copula) *er* と共に用いられているからであろう。とはいえ、Aasen は “*má i von*” を含むフレーズに関しては “*maaskee Subst.*” <おそらく名詞>と附言している。Aasen が編纂したこの辞書は 19 世紀の西ノルウェー語方言の集大成であり、また *von* が古アイスランド語と歴史的に関係の深い *nynorsk* の基となる方言に見出されること自体に何の意外性もない。Aasen はこのフレーズから *von* の名詞の可能性を示唆しているが、ここで突然 *ad hoc* 的に *von* が名詞であるとするよりは、上で想定した名詞形 *\*vānu*-の継承形が西ノルウェー方言に残存していると考えのほうがはるかに無理なく自然である。

ところで Minamisawa (2023: 100 および注釈 11) <sup>3</sup> は Magnús Ólafsson (1650): *Specimen lexicæ runicæ* <sup>4</sup> (*aan* の項) から以下の例文を挙げている。Magnús 自身の説明にあるように、この文に現れる 2 つの *aan* のうち、後者は属格支配の前置詞、しかし前者は「名詞」(*nomen*)と記載している。

*Þad er minstur aan (nomen) ad vera illis aan (Præpositio).*

<悪意が介在しないことが最小限の瑕疵である>

[Magnús によるラテン語訳は <Minimus defectus est esse sine malo>とあるので、「最小限の瑕疵とは悪意が介在しないことである」とも解釈できる。]

この最初の *aan* は文脈からして確かに名詞としか解釈できない。もし名詞形 *\*vānu*-の残存形がここに名詞 *aan* として使用されていたとしてもこの文意に何の違和感もない。ここでもう一度西ノルウェー方言に話を戻すが、前章で指摘したように、語頭の *v* が復元された語彙はかつてそこに *v* が存在していたことを指摘した。無秩序に *v* が付加されたわけではない。すると Magnús の 1650 年の辞書にある名詞 *aan* の存在は西ノルウェー方言にもその対応語が存在していたということを示唆している。それが *ón* であった可能性も十分にありえるし、それに *v* が付加された形で残存していても驚くに値しない。それが西ノルウェー方言の名詞 *von* であっても何の不思議もない。*von* を *v* が復元された形と捉えるなら、かつては *v* が存在していたということになるので、*án/ón* の前身形に名詞 *\*vānu* を想定しても差し支えないであろう。もしくは *von* は *\*vānu* の *v* を保持したままの残存形である可能性も十分にある。ノルウェー方言の *von* の意味を踏まえれば、その直前の再建形 *\*vānu*-の原義は「不足、欠如」と認定してよいであろう。

それでは、名詞 *\*vānu*-がいかなる経過を辿り前置詞 *án/ón* に変遷していったのかを解明していかなければならない。*til* は別にして、先にも述べたように属格を支配

<sup>3</sup> 南澤氏の論文は本稿執筆時点では未公開であったにもかかわらず、氏に本稿執筆のことを伝え、即刻氏の論文を送付してくれた。氏のご好意に感謝したい。見解が分かれる点もあるが、興味ある内容であり、有益な情報も多々含まれ、大いに参考にさせていただいた。

<sup>4</sup> <https://archive.org/details/SpecimenLexiciRu000255578v0MagnReyk/page/n7/mode/2up>.

する前置詞は [名詞+属格] からでは前置詞には発展しえない。そうではなく、核となる名詞の前に何らかの前置詞を置く [前置詞+名詞+属格] の構造にこそ起点がある。すでに触れたが、たとえば、(á) meðal <～の間で>, (á) milli <～と～の間で> では、名詞 meðal や milli の位置を記述するにあたって前置詞 á が選ばれ、フェーロー語の (i) millum <～間で> においては millum の位置を規定するにあたって前置詞 í が選択されている。名詞 \*vānu- に関しても、これが前置詞に発展してゆく過程には [前置詞+名詞+属格] の構造を取っていたに違いない。その前置詞は当然 á や í の選択肢もあったであろうが、\*vānu- に「不足、欠如」の意味があるとなれば、場所を示す前置詞 á や í よりも、その名詞の意味に、より適合する別の前置詞候補が求められたのではないであろうか。「～が不足・欠如・欠乏している」「～が不足のために」などの意味から「～なしに」へと円滑な意味の移行を表すには「位置・場所関係」よりは「原因・理由・由来」を含意する前置詞 af のほうがはるかに適切となろう。3章で前置詞 vegna <～ために> を挙げたときに [af/á+属格+vegna] の構造が示されていたが、そこで「理由、根拠、起因」を表す前置詞には á の他に af も用いられていた。現在の大陸ノルド諸語でもまた英語でも「原因・理由・由来」を表す前置詞にはそれぞれ af/av, of を使用していることから考えても、ここでは同語源である af の選択肢しか浮かばない。とすれば前置詞 án/ón の成立の原点は [af+\*vānu+属格] と結論できよう。

前置詞 af の発音は古アイスランド語で /av/ であることから、/av+\*vānu/ の結合、すなわち /avānu/ が生じる。その際 v-音の連続で v が長子音となり、\*vānu の語頭音 v が脱落し、\*ānu が成立したのではないかと想定される。この音変化を裏付ける根拠の一つは、古アイスランド語の接続詞 meðan <～している間に> の成立過程にある。この語はゴート語の miþpan(ei) <～している間に> (= miþ-þan(-ei)) に同定される (de Vries 1977: meðan)。すなわち、[前置詞 miþ+代名詞 þan(+接続詞 ei)] において、同子音 **þ-þ** が連続する中で、後者の þ が脱落しており、これは、ここで見られる後続子音の v-脱落が十分にありえたことを意味している。

もう一つの根拠はここで再建した \*vānu- とクラッシュする同音異義語 ván/vón <希望> (女性名詞 *ō/i*-語幹) の再建形である \*vānu- の存在である。同音によって引き起こされる「希望」と「不足」という正反対ともなる意味の誤解を避けるため、「不足」の \*vānu- に v-脱落の圧力が働いたことも十分考えられる。さらに Noreen (1913: § 51, 3; 1923: § 116) によると「強勢のある ón に対して、án は proklit. (後接的) で、強勢が弱い」という指摘があることから、án の直前段階にあった \*vānu- ですでに強勢が弱まり、語頭音 v が弱化して脱落したとも想定できる。ここでもう一つ言えることは、強勢のある ón は前置詞として適さず、次第に失われていく一方で、ón は後に v が付加されて西ノルウェー方言の名詞 von として <不足、欠如> に継承されたのか、あるいは v が失われぬままに引き継がれていったのかとも考えられる。

いずれにせよ、Noreen によると、古アイスランド語の一時期に強勢の強弱によって án/ón の両形があったとしているが、án が弱強勢であったとする理由に、án は

proklit.(後接的)であったという指摘があった。このことから読み取れるのは、*án* が独立した前置詞に移行しつつあったからではないかと思われる。ではどのようにして *án* が単独の前置詞に移行していったのであろうか。それは[af+\**vānu*+属格]の構造において、特に強い強勢を必要としなくなった *án* が単独で前置詞の機能を果たせるようになると、af は不要となり、省略されて次第に脱落していったことによるからであろう。直前に置かれた、こうした前置詞の脱落の傾向は(á) *meðal*, (á) *milli* をはじめとし、*vegna* でも観察されているので af の脱落も特に例外的とは言えない。ましてや *vegna* で「原因・理由・由来」を表す前置詞 af が関与し、それが脱落して今日単独の前置詞 *vegna* となった過程を知れば、前置詞 *án* は単に *vegna* の成立過程を先取りしていたに過ぎないとみなすこともできよう。

\**vānu*-に「不足、欠如」という名詞を想定してきたが、すでに指摘したように、古アイスランド語には「不足している、欠けている」を表す形容詞に *vanr* がある。意味も形もここで提案した\**vānu*-と強い類似性があり、そこに着目すると、\**vānu*-は形容詞 *vanr* の名詞形ではないかという疑いがでてくる。そこで\**vānu*-と *vanr* に関連性があるとしたら相互にどのような結びつきを有していたであろうか。まず、その違いは母音の長短 *a:ā* にあり、それはアプラウトの階梯の違いに基づくものであることも理解できよう。そうであれば、もはやどちらが単純に二次的な派生語とはいえない。アプラウトの階梯の違いにより、意味が微妙に変わることも、品詞が転換することもよくあることである(ゲルマン語に関しては Noreen 1890: § 12)。そこで *vanr*/\**vānu* のようなアプラウトの階梯の違いによる形容詞/名詞が他にあるかと言えば、古アイスランド語に次のような例が見出せる(Noreen 1894: § 14)。*varr* [形容詞] <用心深い>/ *várar* [i-語幹女性名詞・複数形] <誓約>である。これにあらえば、\**vānu* は *vanr* の名詞形と想定しても何ら問題はないであろう。

ところで\**vānu* の性・語幹は何であったろうか。Magnús からの引用文で “*minstur aan*” とあることからまず男性名詞が候補に挙がるが、意味が「欠陥、瑕疵」まで拡張されていることから、先に挙げた男性名詞 *vansi* の意味や性の影響を直接受けている可能性があり、これをもって前身形の\**vānu* も男性名詞とするには、はなはだ疑問が残る。むしろ\**vānu* の形自体から推察すれば女性名詞 *ō*-語幹の可能性がはるかに高い。しかも *varr* のアプラウト延長階梯による *várar* が女性名詞 *i*-語幹であることからすれば、\**vānu* の語幹は女性名詞 *i*-語幹の可能性もある。

実は古アイスランド期以前から女性名詞の *i*-語幹と *ō*-語幹は交錯・混同しており、両者の曲用も相当混乱している。ちなみに、*ván/vón* <希望>が「女性名詞 *ō*/i-語幹」などと記されるのはそのためであるが(Iversen 1973: 68.8)，ここでいう「不足、欠如」を表す\**vānu* も同様に「女性名詞 *ō*/i-語幹」と考えて差し支えない。であればこの\**vānu* から生じた\*(*v*)*án*/\*(*v*)*ón* も当然女性名詞 *ō*/i-語幹である。しかし、女性名詞 *ō*/i-語幹の曲用はグループによって単数与格の語尾-*u* がある場合と無い場合に分かれる。*án/ón* に-*u* が残っていないところから判断するに、af が要求する与格の曲用語尾に-*u* は無かったグループに属していたものと判断できる。

さて、\*vānu から\*ānu/\*ōnu を経て án/ón への流れから<sup>5</sup>、1650 年のアイスランド語や西ノルウェー方言などに「不足」を表す名詞の継続形が存在していることを示した。名詞\*vānu やその形容詞 vanr の語源の正当性を裏付ける証拠が他のインド・ヨーロッパ語族の中に見出せないであろうか。Ásgeir (1986: 2 vanur)によると不確かとしながらも、同語源にラテン語の形容詞 vānus <empty>が挙げられている。客観的にみても意味も含めて類似性はかなり高い。この語を Walde (1954: vānus)で調べると、”zu got.wans, an.vanr, ags.won, ahd.wan ”ermangelnd, fehlend”, engl.to want ”Bedürfnis haben, wünschen”, ai.ūnāh ”unzureichend, ermangelnd...”とした後で語根に印欧祖語の\*(e)uān-/\*(e)uān-を再建している。de Vaan (2008: vānus)も vānus はゴート語の wans <empty>と同語源としているので、vānus と vanr の同語源は確実であろう。そしてこの vānus が借用語として英語の vain になるのだが、Watkins (2000: euə-の項)によると、vain の印欧祖語の語根に\*euə-を再建し、以下のような説明がなされている。3, 4 もあるがここは2までの解説を引用する（下線は筆者）。

**euə-** To leave, abandon, give out, whence nominal derivatives meaning abandoned, lacking, empty. Oldest form \*h<sub>1</sub>eu<sub>h</sub>₂-, zero-grade \*h<sub>1</sub>uh₂-, with variant form \*h<sub>1</sub>weh₂-, colored to \*h<sub>1</sub>wah₂-, becoming \*wā-.

1. Suffixed form \*wā-no-.
  - a. WANE; WANTON, from Old English *wanian*, to lessen (from Germanic \**wanēn*), and *wan-*, without;
  - b. WANT, from Old Norse *vanta*, to lack, from North Germanic \**wanatōn*.
2. Suffixed form \*wā-no-. VAIN, VANITY, VAUNT; EVANESCE, VANISH, from Latin *vānus*, empty.

これによれば、アプラウトの問題は laryngeal が適用されて、1 の \*wā-no-からは古アイスランド語 vanr が、2 の \*wā-no-からはノルド祖語の\*vānu-が容易に導き出せ、ラテン語の vānus と同語源であることも明らかとなる。さらに nominal derivatives(名詞派生語)に”lacking, empty”とあることから、本稿で提起してきた名詞\*vānu-の意味が「不足、欠如」に相当するという主張もそのまま裏付けられる。これにより、vanr と\*vānu-両者の関係はお互い特に二次的な派生ではないことも明白となった。

最後に残る疑問が一つある。前置詞 án がどうして3つの格(属格, 与格, 対格)を支配したのかということである。本稿では属格支配の理由については明らかにしたが、残りの与格/対格支配はどこからきたのであろうか。Cleasby & Vigfusson (1957: án)の説明によると、与格支配は “esp. in translations or eccles. Writings, perh. in imitation of the Lat., and now quite out of use”. 対格支配は “esp. freq. in the Grág.”<sup>6</sup>

<sup>5</sup> \*ānu から án/ón への変化について、Krause (1948: § 30, 2)は「á は鼻子音の前後でóになるということからónが生じた(しかしánが一般的)」と述べている。一方、Noreen(1923: § 78)は、ónはU-ウムラウト(Umlaut)によって生じたとしている。いずれであっても、本稿の論旨の流れには直接関係しない。

<sup>6</sup> Grágás とは12世紀以降のアイスランドの法律集である。



とある。つまり、与格支配は翻訳文主体で用法も廃れていることから、ラテン語や他の外国語などの影響を受けている可能性が大きく、しかも一定のフレーズ (*án e-sráði, without (against) one's will, ... ; án úfláti, incessantly*) で用いられるとある。とすれば使用範囲は広くなく、また対格支配も法律関係の文書に頻出するとあることから、その専門性ゆえに使用範囲は限定的で特殊な階層に限られていた可能性があり、これらの格支配が衰退してゆくのはむしろ自然の流れだったのではないだろうか。

与格、対格、さらに属格支配も備え、しかもいずれの格であっても意味の違いはない(Barnes 2008: 3.7.6)とされる前置詞が存在していたこと自体がきわめて不自然であることから本稿は出発した。与格、対格支配はそれぞれ翻訳・教会関係、法律関係が主領域であったことから、ラテン語やドイツ語などからの模倣は当然視野に入るであろう。しかし、それがたとえヨーロッパ諸語の影響によるものであったにせよ、現に3つの格が使用されていた事実がある限り、*án* に与格/対格支配を許す土壌が以前から何らかの形で存在していたと考えるほうが与格/対格使用を無理なく説明できるのではないだろうか。3章で確認したように *án* の由来を考えれば属格支配が一義的であったことは崩せない。一方で、アイスランド語には古今を問わず頻繁に使われてきた前置詞 *á* <*on*>がある。印欧祖語から綿々と伝わり、ルーン碑文にも現れるが、その歴史は *ana* > *an* > *á* として今日に及ぶ。この前置詞の変遷を、ここで議論してきた前置詞 *án* の成立過程\*(*v*)*ánu* > \**ánu* > *án* に比してみよう。母音の長短の違いを伴いながらも *an* と *án* が併行して存在する時期があったことは考えられ、その際使用の頻度数が圧倒的に高い *an* の支配格（与格/対格）が、誤用・混同などにより *án* に入り込んだ可能性がないとは言えない。あるいは、末尾の鼻子音 *n* の有無に弁別を依存していた *á* と *án* が前置詞として共存していた古アイスランド語の時代に、同様な格支配の混同が起きた可能性も十分ありえたであろう。忘れてならないのは *á* も *án* もともに前置詞であって、語頭の母音が *á* もしくは *a* の母音の長短の相違、末尾子音 *n* の聞こえなども考慮に入れると相互作用により誤用を引き起こした可能性は決してゼロとは言い切れず、その間隙に上で述べたような外国語の影響が入り込む余地があったのかもしれない。

ちなみに Buti (1982: 27)によれば、ルーン碑文の *ana, an* <*on*>は与格/対格支配の前置詞であるという。属格支配のみの前置詞に、与格/対格支配が加わるためにはそれなりの強力な力が働かなくては難しいであろう。一方 *án* から与格/対格支配が時代とともに消えてゆく理由は、上で述べたように与格/対格支配の使用される分野が限定的であったからであろう。このようなことから、特殊な分野に限って使われる与格/対格支配は日常的に本格的に根付かなかったのではないかと想像される。結論を出すにはさらに精査する必要がある、ここでは一つの提起に留めておきたい。

ところで古高地ドイツ語の *ánu* はどう解釈すべきであろうか。この語源はまったく別個と考えることもできようが、古高地ドイツ語にも名詞形にはかつて *wan-*を含む *wanawizzi* <無知>, *wanaheil* <病気の>などが存在していたことから、上で想定した \**vánu*-の可能性を探ってみる価値はあるのではないだろうか。

さてここまで、意味はほぼ一致しているにもかかわらず、大陸ノルド諸語の



前置詞とは形がまったく異なるアイスランド語の前置詞 *án* について論じてきた。アイスランド語だけがなぜこのような別個の形をとっているのであろうか。考えられるのは、東ノルド語の語彙には見出せないが、西ノルド語の古アイスランド語には *vanr* があるばかりでなく、それと直接語源的に関連する語も日常的に使われていたことが背景にあるのではないだろうか。たとえば動詞 *vanta* <to want, lack><sup>7</sup> は今でもアイスランド語では普通に使用されているが、ノルウェー語、デンマーク語、スウェーデン語の標準語ではこの動詞は使用されていない<sup>8</sup>。もしそうであつたら、*vanr* などとの同語源群の関係も薄いため、その意味は別の語彙(スウェーデン語 *brist/fattas*, デンマーク語 *mangel/mangle* など)に頼る言語・社会状況であつたのかもしれない。

最後に<～なしに>に相当する他のゲルマン語の前置詞をみると、英語は[with(前置詞)+out], ノルド諸語も[ut/ud+an/en]の構成をとる、いわば合成語である。*án/ón* もここで議論したように、他の構成要素を元来必要として成立したことを強く伺わせる。

## 6. おわりに

意味や用法でほぼ一致しながらも、東西ノルド語間でまったく形が異なる前置詞がもう一つある。それはアイスランド語 *hjá/nynorsk* の *hjá* に対してノルウェー語(*bokmål*)/デンマーク語/スウェーデン語の *hos* <～の家で、～のもとで>である。意味はほぼ同じであるにもかかわらず、語源が異なる語彙は他にもまだある(清水 1987;1992)。これらの違いが一体何に起因しているのか、それぞれがどのような経過を辿って成立したのかなど非常に興味深い分野である。その結果の集大成が東西ノルド語の相違や成立過程に新しい光をもたらしてくれることを期待している。

[2024.09.01.]

\*\*\*\*\*

本号の主演である欧さんへ！ 欧さんも私も魅せられた Edith Södergran の『詩集 (*Dikter*)』から以下の言葉を贈ります。これからの人生に「三つのもの」(*tre ting*)がいつもお手元にありますように！

Du har en lyckokatt i famnen,  
den spinner lyckotråd.

<sup>7</sup> ちなみに、英語の *want* はヴァイキング時代にアイスランド語から借入された語。

<sup>8</sup> Rietz (1867: *vön*)のスウェーデン語方言辞典に、ここで *vanta* と同語源と想定される *vön* <～なしでも大丈夫>、さらにデボーネンス動詞 *vonäs* <～なしでも大丈夫だ>が挙げられているが、使用地域の言及がない。Torp (1919: *Vön*)でも、スウェーデン方言に *vara vön* <～なしで済みます>や動詞 *vänna* <～なしで済みます>の記載があるが、ここでもどこの方言かは言及されていない。Nynorsk を前提とすると *vön* やそれらの関連語の伝播地域は、ノルウェーと国境を接するスウェーデン北西部の方言の可能性が高く、であれば西ノルウェー方言の影響が大であって、必ずしも東ノルド語の語彙とは言えないであろう。ちなみに Torp は *vön* の語頭の *v-* については何の説明もせず、古ノルウェー語の *án/ón* や古高地ドイツ語の *āno* などと同語源としている。

## Om etymologin och uppkomsten av den isländska prepositionen *án /ón* ”utan”

Ikuo Shimizu

### Sammanfattning

Den isländska prepositionen *án/ón* styrde, märkligt nog, tre kasus, dvs. genitiv, ackusativ och dativ under fornisländsk tid, men i modern isländska styr den bara genitiv. Detta ord anses vara etymologiskt besläktat med den fornhögtyska prepositionen *ānu*, grekiska *ἀνευ* och andra indoeuropeiska språk men inget försök har gjorts att lösa härkomsten inom de nordiska språken. Prepositioner som styr genitiv uppstår ofta från en sådan frasstruktur som [(preposition)+substantiv+genitiv], t. ex. [(*á*)+*meðal/milli*+genitiv] eller [(*af*)+genitiv+*vegna*]. Huvudorden i dessa fraser består av ett substantiv t. ex. *meðal/milli* (< *meðal* ”mitt”) eller *vegna* (< *weg*). Författaren utgår ifrån att även *án/ón* ursprungligen var ett substantiv och bildade en liknande frasstruktur. Även *til* (< \**tila*- ”mål”) var också ursprungligen ett substantiv, men eftersom *til* brukar användas med övergångsverb behövde man inte bilda en sådan struktur.

Författaren föreslår att etymologin och uppkomsten av *án/ón* är som följande [(*af*)+\**vānu* ”brist”+genitiv]. I en sådan fras [*af*+\**vānu*] dvs. /*avvānu*/ kolliderar två *v* och *v-* i \**vānu* försvinner och sedan bortfaller även *af* liksom prepositionen (*á*) försvinner framför *meðal/milli*. Spåret av substantivet \**vānu* finns ännu kvar i en nynorsk fras *eg kan ikkje må i von det* ”jag kan inte undvara det”. Det rekonstruerade ordet \**vānu* kan jämföras med det latinska adjektivet *vānus* ”tom, ihålig”, som går tillbaka till den urindoeuropeiska roten \**euə-*, vilket innebär enligt Watkins ”...whence nominal derivatives meaning abandoned, lacking, empty”. I fornisländskan finns adjektivet *vanr* ”lacking, wanting” också kvar och även dess rekonstruerade substantiv \**vānu* anses betyda ”lack, want”. Dessa ords olika avljud kan förklaras med stöd av Watkins teori om roten \**euə-*. Därför anser författaren att de båda orden härrör från samma rot.

### 参考文献

- Ásgeir Blöndal Magnússon. 1986 *Íslensk orðsifjabók*. Reykjavík: Orðabók Háskólans.  
Barnes, Michael. 2008. *A New Introduction to Old Norse. Part 1 Grammar* (third edition). London: Viking Society for Northern Research.  
Buti, Giangabriella. 1982. *Glossario runico (secoli II-VIII)*. Bologna: Editrice CLUEB.  
Cleasby, Richard & Vigfusson, Gudbrand. 1957. (reprint 1962. Second edition). *An Icelandic-English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.  
Edda, die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern. I. Text. (Vierte, umgearbeitete Auflage von Hans Kuhn. 1962). Heidelberg: Universitätsverlag.  
Hallberg, Peter. 1964. *Den fornisländska poesien*. Stockholm: Svenska bokförlaget/Bonniers.  
Hamp, Eric, P. 1982. ”Gothic *inu*, Greek *ἀνευ*, OHG *ānu* ‘Ohne’”, p.189-190. *The Journal of Indo-European Studies*, Volume 10, Number 1 & 2, Spring / Summer 1982. Washington: Institute for the Study of Man.  
Hollander, Lee M. 1936. *Old Norse Poems. The Most Important Non-Skaldic Verse not Included in the Poetic Edda*. New York: Columbia University Press.  
Holthausen, Ferdinand. 1948. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch des Altwestnordischen*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

- Hægstad, Marius. 1916. *Vestnorske maalføre fyre 1350. II. Sudvestlandsk. 2. indre sudvestlandsk, Færøymaal, Islandsk. Fyrste bolken*. Kristiania: Jacob Dybwad.
- Iversen, Ragnvald (7. utgave revidert ved E. F. Halvorsen). 1973: *Norrøn grammatikk*. Oslo: Aschehoug.
- Kellogg, Robert. 1988. *A Concordance to Eddic Poetry*. East Lansing: Colleagues Press.
- Krause, Wolfgang. 1948. *Abriss der altwestnordischen Grammatik*. Halle (Saale): Max Niemeyer Verlag.
- Kroonen, Guus. 2013. *Etymological Dictionary of Proto-Germanic*. Leiden: Brill.
- Lehmann, Winfred P. 1986. *A Gothic Etymological Dictionary*. Leiden: E. J. Brill.
- Lloyd, Albert L. & Otto Springer. 1988. *Etymologisches Wörterbuch des Althochdeutschen. Band I: -a — bezzisto*. Göttingen und Zürich: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Lockwood, W. B. 1964. *An Introduction to Modern Faroese*. København: Munksgaard.
- Minamisawa, Yuki. 2023. “Case government of the Icelandic preposition *án*”. p. 85-109. *Íslenskt mál* 45. Reykjavík: Íslenska málfræðifélagið.
- Noreen, Adolf. 1890. *Utkast till föreläsningar i urgermansk judlära med huvudsakligt avseende på de nordiska språken till den studerande ungdomens tjänst*. Upsala: W. Schultz.
- . 1894. *Abriss der urgermanischen Lautlehre mit besonderer Rücksicht auf der nordischen Sprachen zum Gebrauch bei akademischen Vorlesungen*. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.
- . 1913. *Geschichte der nordischen Sprachen besonders in altnordischer Zeit*. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.
- . 1923. (reprint. 1970). *Altnordische Grammatik I. Altisländische und altnorwegische Grammatik (Laut- und Flexionslehre) unter Berücksichtigung des Urnordischen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- ONP (= Degnbol, Helle, Bent Chr. Jacobsen, Eva Rode, Christopher Sanders & Þorbjörg Helgadóttir (redigeret) 1995. *Ordbog over det norrøne prosasprog I: a-bam*. København: Den arnamagnæanske kommission. )
- Rietz, Johan Ernst. 1867 (reprint 1962). *Svenskt dialektlexikon. Ordbok öfver svenska allmogespråk*. Lund: C. W. K. Gleerups förlag.
- Schulze, Ernst. 1847 (reprint. 1971). *Gothisches Glossar*. Hildesheim & New York: Georg Olms Verlag.
- Schützeichel, Rudolf. 1981. *Althochdeutsches Wörterbuch*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Seip, Didrik Arup. 1955. *Norsk språkhistorie til omkring 1370*. (2. utgave). Oslo: H. Aschehoug & Co. (W. Nygaard).
- 清水育男. 1987. 「古期ノルド語における *dægr* と *dægn* について」, 『大阪外国語大学学報』第75-1・2号 (1987), pp. 1-24.
- . 1992. 「アイスランド語の *tungl* と *máni* について— *sól* と *sunna* を参考にして—」, 『IDUN』X号 (1992), pp. 159-174.
- Skard, Matias (sjette utgåva ved Vemund Skard) 1965. *Nynorsk ordbok for rettskriving og litteraturlesnad*. Oslo: Forlaget av H. Aschehoug & Co.
- Torp, Alf. 1919. *Nynorsk etymologisk ordbok*. Kristiania: H. Aschehoug & Co.
- de Vaan, Michiel. 2008. *Etymological Dictionary of Latin and the other Italic Languages*. Leiden: Brill.
- de Vries, Jan. 1977. *Altnordisches etymologisches Wörterbuch*. (Zweite verbesserte Auflage). Leiden: E. J. Brill.
- Walde, A. 1954. *Lateinisches etymologisches Wörterbuch. Zweiter Band M-Z*. (3 neu bearbeitete Auflage von J. B. Hoffmann). Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- Watkins, Calvert (revised and edited). 2000. *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. (Second edition). Boston & New York: Houghton Mifflin Company.
- Aasen, Ivar. 1892. *Norsk ordbog med dansk forklaring*. Kristiania: Alb. Cammermeyers forlag.